

シンポジウムⅡ

11月16日(金) 10:00～12:00 第1会場(1号館2階 センチュリーホール)

S2-3 “暮らし”と“バリューチェーン”に広がる “近い将来”の人工知能(医療編)

株式会社 野村総合研究所 ICT・メディア産業コンサルティング部
プリンシパル, Ph.D.

やすおか ひろみち
安岡 寛道

野村総合研究所では、産業技術総合研究所の人工知能研究センターと共に、人工知能(AI)が普及した社会・生活、産業・ビジネスの将来像の調査・研究を行っている。本研究において、AI活用の本質は、効率化や労働代替だけではなく、人とAIの役割分担を通じた新しい需要・市場の創造にあることを念頭に置いた。

近年、日本でもAIの概念は浸透してきたが、既存の仕組みの中にAI技術を導入するケースが多い。一方で、古い社会の枠組みを変革する大きな取り組みも必要であり、社会に与える影響をシミュレーションし、人の全体最適な意思決定をAIが支援することが重要である。そこで、AIが需要と供給、人のニーズ、物の在り処や特性、金の使い道など、リアルタイム～時空間を超えて自動的にマッチングすることで、人の多様な生き方を支援できる。例えば、あらゆるモノやコトのC2Cのシェアリングや、時間と場所を合わせた物流サービス、VR/AR技術を用いた故人(知識・経験)とのコミュニケーションまでも行うことができる。

社会・経済活動では、バリューチェーン(VC)上で今まで巡り合わなかった事業者同士をダイナミックにマッチングをすることができる。そこで、人(自己情報コントロール)を中心に、物だけでなく、データのマーケットプレイス(MP)化が進み、新しい活動も生まれる。人はMPで高い付加価値を出せる活動を行い、積極的にデータ化し、それらを取引できる。AIの活用によって、業務を継続的に自動化し、VCの「モジュール化」「アンバンドリング」で産業構造の変革を引き起こす。

以上の社会になると、医療の領域でも変革は起こるはずである。例えば、介護・育児のダブルケア領域で官と民も連携し、新たな社会福祉も可能になる。勿論、無資格診療は許されないが、それらも踏まえた上で、AIが患者とその家族、医師などの医療従事者、さらには派生的に関係する方々を、リアルタイム～時空間を超えて自動的にマッチングできる。こういった環境になると、国内で減ってしまう働き手は、老親は自立的に生活してもらいながら状況をリアルタイムに確認し、子供の世話をパートタイマーにも任せられる。また、誰かが病気の際は、社会への影響を考えながら、行くか留まるかを判断し、昔の名医も含めた何人もの医師のオピニオンを参考にでき、薬は数ある中からその人の価値にあった信頼性のあるものを選び、必要に応じた代替策を取ることができる。医療側は、それらの情報から、その日の診療予測とスケール・スキルに応じた医師の切り分け、ダイナミックな医療連携も可能になる。また、その後のフォローとして、治療状況に応じて、例えば、外食産業と連携した個人向けメニュー提供やアレルギー食材制限などの調整も可能になる。

AIはとかく技術面が強調されるが、このような社会の枠組み変革の発想が必要であり、これまでのバリューチェーン、産業区分などをこえて、新しいデータ～人を含めた社会の繋がりが生まれることになる。

これらについて概説する。